

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 17 日現在

機関番号：35314

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22531043

研究課題名（和文）

地域の教育・文化施設における絵本の「体感型読書」プログラムの開発的研究

研究課題名（英文）

A Study of “The Sensory Reading Program” for Promote a Deeper and Expansive Reading Experience at the Community Centers.

研究代表者

伊崎 一夫（ISAKI KAZUO）

環太平洋大学・次世代教育学部・教授

研究者番号：10574113

研究成果の概要（和文）：「体感型読書」とは、「音声言語を主とする従来の語り手に対して、音楽・映像等の情報を加味し多様な表現活動を保障すること」と、「受動的になりがちな聞き手に対して、物語の再創造の保障と聞き手同士の関わりを活性化すること」の両面が成立する双方向の読書活動である。本研究では、3年に及ぶ多岐にわたる実践データの整理・分析により、読書体験という観点からの分析を試みた。プログラム実施後のアンケート調査等によって、「音楽・映像等の情報を加味し多様な表現活動を保障すること」と「聞き手同士の関わりを活性化すること」の有効性を確認することができた。このことから、音楽等を含む多様なコンテンツによる情報提供と、ボディパーカッション等の参加行為を絵本の世界に重ね合わせていくという能動的・活動的な絵本体験によって、子どもの内面世界となる絵本の世界、作品世界の広がりを確認することができた。

研究成果の概要（英文）：“The Sensory Reading Program” is a reading activity incorporating story-telling with music and the other forms of art. Accordingly, the audience is able to read more independently and come into the dialogue with the story-teller. The purpose of the present study is to clarify our understanding of students' reading experiences as part of a three-year reading program to develop and deepen understanding of reading picture story books. Through data analysis and student feedback the study aimed to foster deeper reading and appreciation of picture story books, particularly through more expansive and diversified interpretations to allow for more informed and detailed narratives.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 22 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
平成 23 年度	600,000	180,000	780,000
平成 24 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教会教育学

キーワード：絵本・読書・大学教育・地域連携

### 1. 研究開始当初の背景

一般の人々による「本を読む」という行為自体は、人間の営みとしては比較的新しいものであり、特に幼児・児童期におけるそれは、近代以降のものである。

公共性の議論において、ハーバーマスは「公共圏」というものは17世紀から18世紀にかけてイギリスの産業革命期に始まったものであり、その契機となったのが新聞であり、「読書サークル」であったと指摘する。このことは、当時もそれまでも、読書は決して「個人的」なものではなく、むしろ共同体をつなぐ媒体としてあったということが、第一義的に規定されるものであることを示唆していると言えよう。なぜなら、人間の文化史においては読書ではなく「語り部」と呼ばれる専門家の話を、共同体がみなで聴くということが通常行われていたものであるからだ。

語り部は「物語る」ことによって共同体の歴史を規定し、それを通して人々は共同体内の道徳や規範意識を共有する営みが続いてきた。

現代の私たち大人にとって、「読書」は非常に個人的な行為である。しかし、その下地が作られる幼児期・児童期の「読書」体験は、多様な読み手（父母、小学校・園・図書館・育児サークルに携わる教職員やボランティア等）によって提供される。実際、子どもたちを対象にした絵本の読み聞かせにおいて、絵本以外の要素を組み込んだ活動は、様々な場所で展開されてきた。しかしながら、それらが研究の土台に上げられ、一定の見地から検証されたことはほとんどない。本研究においては、システム構築の目標の下、連続性をもって個々のプログラムの作成がなされ、検証されていく点において今までにないものである。

さらに、本研究では読み聞かせにおいて、聞き手が複数となる場合の物語を通しての「集合的共有」に着眼している点も大きな特徴である。普通1対1の読み聞かせの場は、読み手と聞き手との相互コミュニケーションによって成立し、そこに総合的な因子や力学等が連続的断片的に作用する。聞き手は、そこで「物語」を通して他者の考え方や感じ方の一端にふれることを体験するのである。しかし、聞き手が複数人数の場合は、さらにそこに聞き手どうしのコミュニケーションが本来ならば存在するはずである。しかし、今日の一般的な読み聞かせの場において、そ

れが実現することは非常に難しく、何らかの働きかけを必要とする。なぜなら、物語を聞く個人はあくまでも「お話を聞く」という目的のもと集まるのであって、その時間限定のものだからである。個人的体験は、「共同体」において共有される体験をくぐることによってこそ、調整され深化する。物語は「再創造」され、聞き手に位置付き、共有化される。このプロセスは、まさに豊かな言語活動の基礎を培うものであり、その本質はものごとを分析、総合、比較、関係づけるなどの論理的思考、吟味的思考、批判的思考である。「読書」体験を通して培われた論理的思考力を駆使し、応用しつつ人間は生きていく。その「応用力」は、幼い頃の「読書」体験、「物語」体験の中で培われ鍛えられるものであり、その豊かさに比例する。物語を通しての「集合的共有」は、現代の教育に求められる「生きる力」の基盤強化に大きな役割を果たすものである。

### 2. 研究の目的

本研究は、絵本の「体感型読書」プログラムの構築により、子どもたちに絵本を深く体験させる絵本鑑賞方法のシステム研究と開発を目指すものである。「体感型読書」とは、「音声言語を主とする従来の語り手に対して、音楽・映像等の情報を付加し多様な表現活動を保障すること」と、「受動的になりがちな聞き手に対して、物語の再創造の保障と聞き手同士の関わりを活性化すること」の両面が成立する双方向の読書活動である。

同時に、この研究は大学における研究・教育実践の延長線上に位置づけられるものである。開発のプロセスを通して、教育学部学生たちの「人間力」「教育力」の向上を目指し、次世代の教育者の育成に寄与する。さらに、地域との連携を生み出し、新設大学の地域における教育財としての存在意義を高めるとともに、地域の教育財の活用とさらなる地域文化の発展を目指す。

### 3. 研究の方法

本研究においては以下のプロセスを経て目的達成を目指す。

(1)地域の幼稚園・保育園、小学校等の教育機関、図書館・美術館等の文化施設などにおける「体感型読書」プログラムの特性を明らかにし、それぞれの場に対応する様々なタイプの「体感型読書」の実践を行う。

(2) (1)の分析により、「体感型読書」プログラ

ムの核となる要素を抽出すると同時に、場や対象によってアレンジが必要な要素を峻別する。

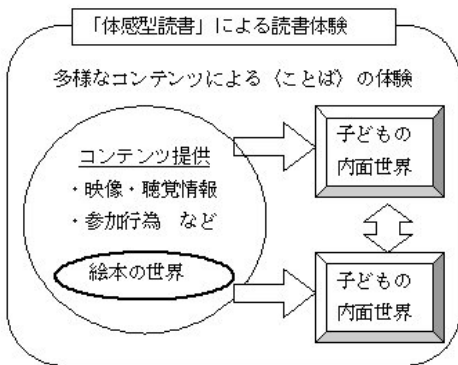
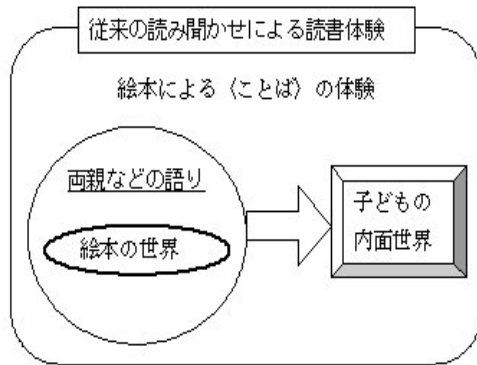
(3) (1)(2)の結果をふまえ、多様な場に適應する形での実践例を提示し、応用可能な「体感型読書」プログラムを構築し、その汎用性を確認する。成果を学会で発表および、書籍として刊行する。

#### 4. 研究成果

##### (1) 「体感型読書」の特質と構造

「体感型読書」は、絵本の読み聞かせの可能性を開き、聞き手の読書体験の深化・拡充を保障する鑑賞方法である。従来の読み聞かせにおける両親等の語りによって提供される情報を多様化し、受動的になりがちであった聞き手の絵本の世界への積極的な参加・関与を促す。その概念図を資料①に示した。

資料① 読み聞かせによる読書体験の違い



##### (2) 「体感型読書」プログラム「ももたろう」の特徴とその具体化

今回のプログラム「ももたろう（松居直・作、赤羽末吉・絵、福音館書店）」では、絵本の挿絵だけを取り出し、スライド化した。テキスト部分については、そのほとんどは語りに委ねられている。しかし、昔話の特徴を生かし、リズムカルなオノマトペやキーセン

テンスのみ、スライド上に添えている。テキストでありながら、視覚的な効果を与えているといえる。

パワーポイントのアニメーション機能を駆使し、スライドショーにおいて、スライド上の画像、テキストに動きを与えることによって、体感型読書への効果を高めている。さらに、和テイストをベースとした音楽を基調に、単なるBGM的な挿入ではなく、桃太郎誕生や鬼ヶ島到着等の場面転換が際立つように積極的な挿入方法を工夫している。さらに、3年生バージョンでは、桃太郎が鬼ヶ島へ向かう場面ではボディパーカッションを組み込んだ。

従来の読み聞かせと今回の「体感型読書」の情報提供の特徴について、それらの違いを整理したものが資料②である。従来の読み聞かせを「静」の読書体験とすれば、「体感型読書」は「動」の読書体験となっているといえよう。

資料② 従来の読み聞かせと「体感型読書」の情報提供の違い

		従来の読み聞かせ	「体感型読書」
視覚情報	挿絵	○(主)	○
	テキスト	△(従)	○
	提示の仕方	順送り	スライドショー
聴覚情報	語り	○	○
	音楽	×	○
視覚・聴覚情報の提示の仕方		平面的(同時)	立体的(前後、併行など)
参加行為		×	○

##### ①視覚情報・聴覚情報の工夫と効果

視覚情報では、前述したように、挿絵を中心としながら特徴的なテキストがスライドに添えられる。従来の読み聞かせでは、絵本は紙面のまま提示される。紙面は挿絵とテキストによって構成されているが、聞き手の注意は挿絵に向けられる。今回の絵本「ももたろう」は、リズムカルなオノマトペや台詞の提示がレイアウトとして工夫されているが、イラスト的な強調を伴う紙面構成として行われているわけではない。「体感型読書」では、そうしたテキスト部分だけを取り出し、スライドショーにおいてアドインさせている。読書対象としてテキスト部分が強調される。この点においてテキストは、従来の読み聞かせでは「従」であるのに対して、「体感型読書」では、挿絵同様に「主」としての効果を果たすことになる。

聴覚情報は、語りと音楽によって提供される。語りについては、今回のプログラムでは、登場人物や場面の状況に合わせて語り手を二人とした。このことによって、一人が読む、

二人が同時に読むなどの群読的な音読の工夫が可能になり、語り口に重層感が生まれた。

また、音楽については、絵本の内容とプログラムの特質をふまえて、使用する音楽の作曲を作曲家である山口聖代氏に委嘱した。物語世界の雰囲気が体感できる和テイストの音楽と、物語の展開に合わせた効果音を組み入れた音楽とが相乗効果を発揮し、聞き手が無理なく、物語世界に身を置くことができる作品となっている。

## ②「体感型読書」ならではの強み

「体感型読書」では、視覚情報と聴覚情報を立体的に提示することが可能となる。絵本の紙面に挿絵を追加したり、ページ送りのタイミングを音楽や効果音等によって制御したりすることによって、作品世界の理解を十分に保障する。いわば簡易版アニメーション的な情報提示である。従来の読み聞かせでは流れてしまいがちな、冒頭部分の設定に関する情報や場面展開の必然性を補完し、読書体験の質的なベースを整えることに寄与する。「体感型読書」ならではの強みである。

参加行為としてのボディパーカッションは、今回の実践では3年生バージョンに組み込んでいる。鬼ヶ島へ向かう場面において、挿絵を提示するスライドの提示時間を長く取り、音楽に合わせてボディパーカッションを行うようにした。

## (3)「体感型読書」「ももたろう」の実際と児童アンケートの結果

今回の実践は、平成23年2月22日に三田市立富士小学校・音楽室で行った。対象学年は、3年生（2クラス合計55名）と5年生（2クラス合計53名）である。

写真①のように大画面のモニターを用いて、視覚情報が提示される。写真の右手には語り手（2名の内の1名）が位置し、写真の手前側にもう一人の語り手がいる。画面近くで、音楽等の聴覚情報を操作しているのは、作曲家である。プログラム開発に直接携わったメンバーが、役割を分担し、聞き手である子どもたちの様子を見ながら、進行している。これは、3年生、5年生とも共通である。

前述したように、参加行為としてのボディパーカッションは、3年生のみ実施している。写真②は、プログラム開始前に行ったボディパーカッションの取り出し練習の様子である。作曲者が直接指導に当たっている。プログラムの中では、写真③のように子どもたちだけでボディパーカッションは行われる。

写真①



写真②



写真③



今回の実践では、「体感型読書」プログラム終了後、アンケート調査を行った。アンケートによって、具体的にどのような思いや感想を持ったのか、より詳細にとらえることができた。

プログラム全体については、「画像の大きさ」「音楽が流れていること」「語りの読み分け」に対して肯定的な感想が大半を占めた。以下、アンケートの項目から特徴的な2点を選び、紹介したい。いずれの項目も、自由記述による回答である。

## ①「体感型読書」と従来の「読み聞かせ」との違い

【質問内容】今日の「ももたろう」（「体感型読書」）と、ふつうの読み聞かせとを比べて、どちらの方が好きで

すか。それは、なぜですか。

「体感型読書」の方が好きだという児童と従来の読み聞かせの方が好きだという児童の割合は、5年生、3年生共に、おおよそ5:1であり、「体感型読書」が優位である。その理由として、「音楽と画像があり、お話の流れを体で味わうことができた」「音楽があり、特に戦うところでは迫力があつた」「場面ごとに音楽が変わるので、すごくリアルな感じがした」等が挙げられた。5年生では、スライドや音楽の効果に対する評価が高い。3年生では、ボディパーカッションによる参加行為が高く評価されている。

## ②「ももたろう（松居直・作、赤羽末吉・絵、福音館書店）」の特徴について

【質問内容】今日の「ももたろう」と、あなたが知っている「ももたろう」とで違っているところはありましたか。

読書体験の深まりを評価することは難しい。従って、この項目によって、今回取り上げた「ももたろう」と、一般的に知られている桃太郎との相違点を尋ねている。絵本の世界との質的な関わり方について、話の内容の違和感によってある程度判断できるのではないか、と考えたからである。

具体的には、「最初に桃が流れてきたとき、おばあさんが食べるころが違っていた」「知っている『ももたろう』は宝物も取り返したという話だったけど、今日のは宝物はいらなと言っていた」「宝物を取り返す話じゃなくてお姫様を助ける話だった」などの気づきが出されている。5年生、3年生共に、松居直作品の特徴が的確にとらえられていた。お話の冒頭部分の意外性や民話調の抑揚のある語り口調の響きが、音楽などの聴覚情報と相まって絵本世界を体感することに寄与したものと思われる。

## (4)「体感型読書」の可能性とその充実に向けて

「地域の教育・文化における絵本の『体感型読書』プログラムの開発的研究」の取り組みは、3年目を迎える。本論文で取り上げた実践データは、その一部分に過ぎない。また、本研究は、「学校・文化施設による〈持続可能な地域文化力〉を育む『連携型プログラム』の開発研究」（科研B・代表者山本美紀）ともリンクしている。

本研究は、読書体験という観点からのアプローチを試みた。しかし、絵本を含む多様な読書情報の持つ価値とその展開方略に関する研究は、その広がりが見えるほどにスタートしたばかりであるともいえる。しかも、読書情報を絵本に限定しても、その学習材、プログラムの多様性は多岐にわたる。

国語教育、音楽教育、生涯教育、地域の教育力などの視座からの追究も可能である。さらに分析を深め、研究の発展に努めたい。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

- (1) 伊崎一夫「読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究(2)－『つなぐ』思考の活性化－」, 環太平洋大学研究紀要第4号, pp. 65-71, 2011. 3
- (2) 伊崎一夫「読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究(3)－『さぐる思考』の活性化－」, 環太平洋大学研究紀要第5号, pp. 51-60, 2012. 3
- (3) 伊崎一夫「読書体験の深化・拡充を促す絵本の読み聞かせ(1)－『体感型読書』プログラム「ももたろう」の特徴と効果－」, 環太平洋大学研究紀要第6号, pp. 91-98, 2012. 10
- (5) 伊崎一夫「読解リテラシーの向上をめざす学習指導の工夫に関する研究(4)－「いいところ見つけ交流活動」の活性化－」, 環太平洋大学研究紀要第7号, pp. 89-96, 2013. 3
- (6) 山本美紀「音楽科教育における他分野教育との連携への考察:音楽と物語— 展覧企画『木を植える人』から体感型読書『スイミー』へ—」環太平洋大学研究紀要第4号, pp. 57 -64, 2011. 3
- (7) 山本美紀「地域の音楽資源の活用によるこどもの表現活動充実への一考察—初等教育における音楽体験の場の創造をめぐる—」環太平洋大学研究紀要第7号, pp. 43-51, 2013. 3

〔学会発表〕（計2件）

- (1) 山本美紀「音楽科教育における地域連携の可能性をさぐる—広がる教室とこころの育ち—」, 第26回人間教育実践交流会2011年 芦屋フォーラム「確かな学力とこころの教育—新教育課程とその実践—」, 2010年8月12日、芦屋市立宮川小学校
- (2) 山本美紀「コンサートホールにおける『教育プログラム』の構造と作品アプローチ—ウィグモア・ホール Wigmore Hall (英国: ロンドン) の教育プログラムを中心に—」日本音楽学会第62回全国大会、2012年11月5日、東京大学

〔図書〕（計5件）

- (1) 伊崎一夫「文学教材の論理的読解のために—「主題把握」とテキストの多様な情報に関連付けることを—」, 『教育フォーラム 51

言語活動—『読み』『書く』の力を中心に』, 金子書房, pp. 48-58, 2013. 2

- (2) 山本美紀「共感する心を育てる音楽科教育—音楽の力とこころの育ち」『教育フォーラム 47<こころ>を育てる』, 金子書房, pp. 60-69, 2011. 2
- (3) 山本美紀「音楽教育を通じて異文化理解教育を—ウィグモア・ホールの教育プログラムに学ぶ」『教育フォーラム 48 国際教育の課題と展望』, 金子書房, pp. 103-116, 2011. 8 (8)
- (4) 山本美紀、ヨベル社、【改訂新版】小学校で培う音楽の力—共感する心を育てる、2012
- (5) 山本美紀,他、ヨベル社、【改訂新版】幼児教育・初等教育のための音楽基礎知識と表現—音楽でつむぐ学びの歳時記<伴奏譜・楽器解説付き> 【pp.7-9,12-15, 18-21,24-27,30-33,36-39,42-45,48-51,54-57,60-63,66-69,72-75,78-81,84-87,90-93,96、別冊課題：全 32 ページ分）：単著】

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

伊崎 一夫 (ISAKI KAZUO)  
環太平洋大学・次世代教育学部・教授  
研究者番号：10574113

### (2) 研究分担者

山本 美紀 (MIKI YAMAMOTO)

環太平洋大学・次世代教育学部・准教授  
研究者番号：60570950